

武蔵野日曜聖書講筵（年頭講筵）

汝はわが力

―― 詩篇第84篇 ――

1970年1月4日

小池辰雄

人生の旅路の歌 汝の幕屋 汝はわが衣食住 無名の一流者 さいわいなるかな、汝を家とする者は その力なんじにあり 力と無力 静動一如 三相一貫 涙の谷 涙を歓喜に 力より力に 一日は千年 神は日なり 詩「白熱の魂」（本願道） 一切はキリストを生きたる恵み

【詩篇84】

ギテトの琴にあわせて、うたのかみ 伶長にうたわしめたるコラの子のうた

1 万軍のエホバよ、

なんじの帷幄あげぼりはいかに愛すべきかな。

2 わが靈魂たましいはたえいるばかりに

エホバの大庭おおにわをしたい、

わが心わが身はいける神にむかいて呼ぼう。

3 誠まことやすずめは窩やどりをえ

燕子つばくらめはその雛をいるる巢をえたり。

万軍のエホバわが王わが神よ、

これなんじの祭壇なり。

4 なんじの家にすむものは福さいわいなり。

かかるひとはつねに汝をたたえまつらん。

5 その力なんじにあり、

その心シオンの大路おおじにある者は

さいわいなり。

6 かれらは涙の谷をすぐれども、

其処そこをおおくの泉あるところとなす。

また前の雨は

もろもろの恵みをもて之をおおえり。

7 かれらは力より力にすすみ、

遂におのおのシオンにいたりて

神にまみゆ。

セラ



8 万軍の神エホバよ、
わが祈りをききたまえ。

ヤコブの神よ、

耳をかたむけたまえ。

セラ

9 われらの盾なる神よ、みそなわして、
なんじの受膏者の顔をかえりみたまえ。

10 なんじの大庭にすまう一日は

千日にもまされり。

われ悪の幕屋におらんよりは、
寧ろわが神のいへの門守とならんことを欲うなり。

11 そは神エホバは日なり盾なり。

エホバは恩と栄光とをあたえ、

直くあゆむものに善物をこばみたもうことなし。

12 万軍のエホバよ、

なんじに依頼むものはさいわいなり。

●人生の旅路の歌

この詩篇84篇は46篇と似た性格をもった詩篇であります。46篇は非常なカタストローフの、世界の大変動の、歴史的な大事件のあとで多分、書かれたものとして大きな響きを持っています。マルチン・ルターの宗教改革の進軍歌のようになった詩篇です。しかし、84篇がまた人生の旅路の歌として、非常に深くまた力強い消息をもっている。

「ギテトの琴にあわせて伶長にうたわしめたるコラの子のうた」

という。「ギテト」というのははつきりしないけれども、多分、地名ではないかとも思われる。詩篇8篇や81篇あたりに「ギテト」という言葉が出てきます。また、84篇は詩篇の42、43篇あるいは63篇あたりと気持の似たところ、またそういった句が出ています。あるいは、同一の作者かもしれない。大体、いつ頃作られたかというのも、実に学者によってまちまちで、いっこう分かりません。

第一回のバビロニア捕囚が紀元前597年ですが、その捕囚されていったある人――多分、祭司的なひとでしょう――そういった人が、シオンを、エルサレムを想って書いた。そういった非常に憧れの気持の強い面が出ている。しかし、神殿のことが出ているので、第二バビロニア捕囚――本捕囚が586年で、これが本格的な捕囚ですが、そのときにはもう既にちやうどエルサレムが陥落したときで、神殿はなくなっていますから――多分597年と586年の間に作られたのではないかという説がありますが、だいぶそれが本当に近いかとも思います。



● 汝の幕屋

1 万軍のエホバよ、

「万軍のエホバよ」「万軍のヤーヴェーよ」という言葉が、詩篇46篇もそうですが、ここに4回出ている。

なんじの帷幄あけぼりはいかに愛すべきかな。

2 わが靈魂たましいはたえいるばかりに

エホバの大庭おおにわをしたい、

わが心わが身はいける神にむかいて呼ぼう。

この1節、2節がキーノート（基調、要旨）ですね。1節から4節、5節から8節、9節から12節と、ちょうど4節ずつの4つの節からなつていているところの詩です。4節と8節の終わりに「セラ」と書いてあるでしょ。この「セラ」というのが、多分、音節のうえのひとつの符号らしい。

1 万軍のエホバよ、

なんじの帷幄あけぼりはいかに愛すべきかな。

帷幄あけぼりという訳が――新しい訳では「すまい」と訳してある――いい訳ですね。「シャーカン」という字からきてますから、「ヒュッテ」「小屋」「タバナクル」「幕屋」。

「汝の幕屋はいかに愛すべきかな」

と。私が「幕屋」という言葉を使いましたけれども。即ち、「幕屋」というのは布で張られたものだから。

2 わが靈魂たましいはたえいるばかりに

という、非常に強い言い方をしています。英語でいうと、「ヤーン」という字が書いてあります。ドイツ語でいうと、「シュマツハテン」「こがれる」というような言葉です。魂が焦がれるばかりに、絶えいるばかりに、

エホバの大庭おおにわをしたい、

わが心わが身はいける神にむかいて呼ぶ。

わが身心、身も心も、身心的にということ。「ハート」という字と「フレッシユ」、「ヘルツ」（心）と「フライシュ」（身）という字が使つてある。

「活ける神」は

「エール・ハイ」

といひまして、この「エール」「神」という字が、「力」という意味をもっている。

「力あるもの」

神は力あるもの、活きた力の存在です。わが心も体も、全存在的に活ける神に向かって叫んでいると。



●汝はわが衣食住

私はこの句を読んでいておもしろいと思ったのは、「汝の帷幄、汝の大庭」、それから「活ける神」ときた。

「汝の帷幄」

は衣のごとくであり、

「エホバの大庭」

は住まいのごとくであり、

「活ける神」

は食べ物みたいなもの。即ち衣食住という、衣・住・食のように、

「汝の衣、汝の住まい、汝の体を慕い求める」

という。

「我を喰らい、我を飲め」

とキリストが言われましたが、神さまは生命の生命なんだから、これは食わなければどうにもならない。全存在的に神さまに食いつき、神さまを飲まなくては。そういうような気持でこれを読むというと、これはおもしろい句だなあと思った。

まあそんな註解はどこにもないですよ。「帷幄」といおうが、「大庭」といおうが、結局、神そのものを本当に慕い求めている。私たちにとっては「万軍のヤーヴェー」は正にキリストです。キリストの御衣に触れば直ちに病が癒えてしまった、あの福音書の事態をそのまま思ってもいいわけです。

キリストの住まいは何かというと、これ至る所がキリストの住まいで、キリストの在るところ即ちキリストの住まいです。即ち逆にいうと、キリストを住処とするわけだ。キリストを衣とする。「汝の帷幄」とか、「汝の大庭」と言いましても、帷幄なる汝、大庭なる汝、この活ける汝、というわけです。三人称で書いてあっても、私たちはすぐこれを二人称として「汝」として読まなければ、力にならない。即ち、

「キリストを衣よ」

とパウロは言った。キリストを着、またキリストを住処としてキリストの中に住まう。

「わがうちに留まれ、わがうちに宿れ」

とキリストは言われた。ヨハネ伝14章。また、

「われを喰らい、われを飲め」

と言われた。ヨハネ伝6章、7章。わが全存在がキリストを衣となし、キリストを住処とし、キリストを食べ物とする。これはもう、「向かいて慕う」「呼ぶ」と言って、捕囚の事態から――まあこれは旧約の限界ですから――エルサレムの方に向かって、それに憧れている。しかし、それは単なる神殿ではない。もちろんそこに「活ける神」ということがあるんですけれども。もつともつと、私たちにとっては信仰は現実。だからもう新約の光で読めば、



旧約の文字の背後を読んでしまう。我々が「詩篇」といつて使うときには、それでやっていかないと、ユダヤ的限界において詩篇を読んだって何にもならん。

「万軍のキリストよ、汝の帷幄はいかに愛すべきかな。わが魂は絶えいるばかりに」
「わが魂、わが心、わが身」と言い方は、パウロが

「霊と心と体」

という言い方をしますが、ちょうどそれがここに出ています。テサロニケ後書の終わりの方だったかな。その霊・心・身。即ち、

「魂と心と体、全存在をもつて汝を衣食住とする」

というわけだ。これが信仰の現実です。単なる憧れではない。ここではまだ「あこがれ」というようなところがあるけれども。

詩篇42篇のところにも、

「ああ神よ、しかの溪川たにがわをしたい喘ぐあえがごとく、わが靈魂たましひもなんじをしたいあえぐなり。²わがたましひは渴けるごとくに活神いけるかみをしたう。

ここに「活ける神」と、正に同じ字が使つてある。

何れいずのときにか我ゆきて神のみまえにいでん。」（詩42・1、2）

もつとそれが「即」の世界に、「即如」の世界になるわけです。

こないだ、私はクリスマスの詩を読みましたでしよ。「主の身しながら」という題にした。今日はあとで「白熱の魂」という1970年頭の詩を読みます。

この1節、2節を読むと、本当にキリストをわが衣食住とするということ。

「何を着ん、何を飲まん、いずこに住まんと思ひ煩うなかれ」

とありますが、

「我を着、我に住まい、我を食え」

と。あそこの註解のただ一言はそれで尽きると思う。

●無名の一流者

3 誠まことやすずめは窩やどりをえ

つばくらめ
燕子はその雛をいるる巢をえたり。

万軍のエホバわが王わが神よ、

これなんじの祭壇なり。

4 なんじの家にすむものは福さいわいなり。

かかるひとはつねに汝をたたえまつらん。

「福さいわいなるかな、なんじの家にすむものは」

これは、どうしたって、「福さいわいなる」というのは先にもつてきた方がいいね。キリストの言葉もあの



「幸いなるかな」

というのが先にきている。もちろん、ギリシア語はそうです。こういうところの訳はやはり、その気合をもって訳してくれないと困る。これはせっかく詩文なんですから。

「さいわいなるかな、なんじの家に住むものは」

です。「なんじの家に住むものはさいわいなり」なんていうと、説明的散文的になってしまう。私に言わせると、

「さいわいなるかな、汝を住まいとするものは。」

かかる人はつねに汝をたたえまつる。」

と。さつき一遍上人や才市さいいち（浅原才市1850～1932、浄土真宗の妙好人のひとり）のお話がありました。素晴らしい世界なんです、正直。

私たちははつきり、旧約の世界は乗り越えてしまっている。もちろん、旧約の世界に素晴らしいものがあつて、ただ単なる表現でなくて、現実において乗り越えている世界がある。旧約もちろんその世界を持つている。持つているけれども、どうもその表現のズレが多い。その点では、なんといつても新約の「即」の世界です。それから、仏教の一流の人たちの世界。「二流」というのはなにも地位的に一流というのではなくて質的に一流な人たちです。無名の一流者がいくらでもいる。あなた方もその無名の一流者に、我々は無名の一流者にならなくてはダメだ。この福音を受けていて、無名の一流者にならなかつたらしょうがない。だからもう、第二、第三のものはだんだんおもしろくなってきた。なんでも第一流のものしか興味がなくなってきた。それは、第一流のものということは、なにも名声の上でない。本質的に第一流のものでなくては魂にうつたえなくなってきた。

日本の70年代はどうなるか、またどうするか。皆さんは非常に大事な課題をになっているし、また力をいただいているわけですから、どうぞ、その点では言葉の正しい意味における自重、自尊をしていただきたいわけです。

●さいわいなるかな、汝を家とする者は

3 誠まことやすずめは窩やどりをえ

3 誠まことやすずめは窩やどりをえ
つばくらめ 燕子はその雛をいるる巢をえたり。

と、うるわしい句だね。雀や燕の、小さな鳥のことを思っている。屋根のところに燕や雀が巢を得ている。いつかもお話したかと思うが、宮城（皇居）の前に楠公なんこう（楠木正成）の銅像がある。あの馬の尾の所に雀の巢がある。ああいうのを写真に撮らないとダメだよな。

3 誠まことやすずめは窩やどりをえ
つばくらめ 燕子はその雛をいるる巢をえたり。

3 誠まことやすずめは窩やどりをえ
つばくらめ 燕子はその雛をいるる巢をえたり。

万軍のエホバわが王わが神よ、

これなんじの祭壇なり。



と読んだって、これは何のことやら分らないでしょ。ドイツ語や英語でいうと、「誠やまずめは窩^{やどり}をえ燕子^{つばくらめ}はその雛をいるる巢をえたり」というものを「エス」とか「イット」といつて、全体の文章をひつくるめて、

「雀が宿りをえ燕子の雛がその巢をあなたの神殿に得たということは、私にとっては汝の祭壇である。汝の祭壇は私にとってはそういったことである」

ということなんです。その「私にとっては」というのがぬけてしまっている。そういう読み方をするのが一番よろしいと私は思っています。「これ」というのは、こういった事態が私にとっては汝の祭壇である。汝の祭壇は私にとっては、神殿の屋根が燕や雀の巢であるように、あなたの祭壇が私にとってはそれなんだと。

「これ汝の祭壇なり」

とは、

「これ我にとりて汝の祭壇なり」

「汝の祭壇はこれ我にとりてそれなり」

というようなわけなんです。祭壇には、なにも燕や雀は来ませんよ、これは屋根にくるんだ、鳩と同じに。祭壇のところに行くと、焼かれてしまうよ、これは生贄^{いけにえ}だから。この作者はそのように神殿の祭壇というものを懂れて、そこを住まいとするという。

「^{さいわ}福いなるかな、なんじの家にすむ者は」

を、

「^{さいわ}いなるかな、汝を家とする者は」

と、そういうように書いてはないけれども、私はそう読んでしまう。

「^{さいわ}いなるかな、汝を家とする者は。

かかる人はつねに汝をたたえまつらざるをえず。

かかる人は常に汝を讃とう。」

と。それが第一段です。

●その力なんじにあり

⁵その力なんじにあり、

「その力は汝にあり」という言い方ははつきりしている。

その心シオンの大路^{おおじ}にある者は^{さいわ}いなり。

これも「^{さいわ}いなるかな」「アッシュレー」という言葉が先にきているので、

「^{さいわ}いなるかな、その力なんじにあり、その心シオンの大路にある者は」

です。「シオンの大路」というのは、日本語訳で「シオン」を入れてしまったので、この「シオン」という字は原文にはない。

「その心大路にある者は」



ということ。ドイツ語のルッター訳にもやはり書いてない。「シオン」というのは日本語の訳で入れてしまった。この「大路」という訳は、「シオンの大路」と取るのも結構なとり方ですけれども、

「そのころ巡礼にある者は」

と。即ち、シオンへの巡礼、シオンへの旅。私たちにとっては、天のエルサレムへの旅、天国への旅だよな。神の国への旅にある。その心の目当てが神の国への旅路にある。

「その力なんじにあり」

と。この句から今日は「汝はわが力」という題をつけたわけです。「神」「エール」という字がぎつき言ったようにこの「力」という字ですから。「その力は汝にある」というよりも、もつとはつきりいうと、

「汝はわが力なり。汝はわが力である」

ということ。汝を力とする者だね。ドイツ語の訳にも、

“wohl dem, dem du Kraft bist.”

「その人にとって汝が力であるところの、その人に幸いあれ」

という。汝を力とする者。「汝の中に力あり」という分析でなくて、汝そのものが力なんだ。もう無限の、無限無量の、そして内容はいろいろなものを持った力です。知恵の力でもあるし、霊的な力でもあるし、また愛の力でもあるし、生命の力でもあるし、とにかく要するに限定しない、無限定の力です。汝が力である。キリストが力である。

●力と無力

詩篇45篇4節に

「⁴なんじ真理と柔和とただしきとのために威をたくましくし、勝をえて乗り
すすめ。なんじの右手なんじに畏るべきことをおしえん。」（詩45・4）

とある。素晴らしい句です。この「柔和」という字は「心の貧しい」という字と同じで、非常に謙遜な字です。力強さというものと、それから謙虚な柔和、

「我は柔和なれば……」

とキリストも言われた。その謙虚な、何ものとも自分を思わない。キリストが非常な英雄ますらおであつた。そのことは藤井先生も45篇で書いてあるところがある。その一段をちよつとお読みします。藤井先生は詩篇45篇を「男性美・女性美」という題で書いておられる。

「我らの主にして王なる彼、キリスト・イエスは実に人の中の人であつた。彼において我らは理想の人を見る。……二度繰り返して言う、真理と柔和と正義とのため、これ正に神の英雄の戦闘の標語である。かくのごとき戦闘は英雄彼自身のものではなくして、神のものである。」

キリストのますらお、英雄さはいいですよ。英雄さは神のものであると。



ゆえに、その勝利は必然である。神は彼の右にありて自ら戦う。神は彼の右手をして畏るべき業を現わしめる。彼自らおのれを動かす不思議なる力に驚く。しかしてその戦闘は誠に自分のものでないことを知る。

先生もはつきりと、キリストの英雄さは全く神の力であつて、彼のものではないと言う。イエスの生涯はかくのごとき生涯であつた。彼は世にあるときよりして常に英雄であつた。彼は絶えずその剣を腰に帯びた。精神と靈魂、関節と骨髓とを通しわかつころの

これはパウロの言葉です。

両刃の利き剣なる神の言葉を身に帯びた。このゆえにイエスの在るところ必ず權威があつた。彼が語るときには学者の如くならず權威ある者の如くあつた。その愛を行ひ柔和を説く時といえどもイエスに權威のなかつたことはひとつもない。その人としての弱さを表す時にさえ、イエスは断じて卑怯者の如くならず、まことの勇者の如くこれを表していたのである。実に四福音書に漲るイエスの最大印象は英雄、真実の意味においてのヒアローたることにありと私は信ずる。」

というような文章がある。力、それから無力。謙虚なすがたはこの無力なすがたです。しかし、それがまた力をもつて現れる。それで、「男性美・女性美」なんていう。その「女性美」はあの方の詩句から持ってきたのだけでも。

● 静動一如

これをもうひとつ言うと、動と静。これは両面がなければダメですよ。私は「汝はわが力」と言つたつて、ただもう外側に暴力的に現れるような力を力なんて思つたら困る。

人間には非常に動的な人と静的な人があるわけです。男の方の中にも、女の方の中にも、非常にもの静かな人と、それからなかなか賑やかな人と。男でも、非常に外側に動的に表れるのと、なにか静かなのと。

けれども、本当の動は必ず中に静をもつていなければダメです。そんなのは騒がしくてしょうがない。騒がしいような動ではダメだ。それから、本当の静は中に動的なものを宿していなければ本当の静でもまたない。そうでなければ、そういう静は氣力のない静です。静けさのうちにももの凄い動を宿している。動いているがしかし内側は本当に静かなものをもっている。どっちもこういう構造でなかったら、この静も本ものでないし、この動も本ものでない。そういう静動というものを、どうぞ皆さんは、身に本当につけてください。

人間というのはいろいろ型が、タイプがあるから。タイプは仕方がない。しかし、そのタイプが、ある全的な構造をもつためには、動の中に静をもち静の中に動をもっている、静動一如です。動静一如、静動一如という、そういう姿にどうぞなつてください。そうしたら、賑やかな人たちと静かな人たちが本当に和して調和ができる。あの人たちのあの



面と、こちらの人たちのこの面と、お互いにそれが調和をなしていく。男の間であろうと、女の間であろうと。これが集会としても、みんなが動であつてもダメだし、みんなが静であつてもダメだ。また、動にも静にもいろいろな段階があるでしょう。いいんですよ、いろいろであつて。みな厳密に言えば一人ひとり違うんだ。

そういうようなわけで、構造的にはちゃんとそういうものをわきまえて自分のうちにもっている。これはどうしてできるかというところ、キリストという方は静動一如をちゃんとそなえた方なんです。非常に静かな、もう夜をこめて夜もすがら静かに祈ることのできたひと。本当に柔和そのものの魂であると同時に、また発すればもの凄い動である。神殿で売り買いしている者を縄で叩き出すような荒いこともやってみた。キリストがあんなことをやったから、私たちもやろうなんて、外側のまねをしたつてダメですよ。

そういうキリストという方が本当の動と静をちゃんと兼ねそなえている。しかも、その「兼ねそなえ」とは決して二分しているのではない。これは本当の意味においては、もう溶け合っている。動中の静、静中の動です。それが男性的な面と女性的な面を、男でも女でもそれをもつていなくては。男女両性みたいなもの。もちろん、女は女らしく男は男らしく、というんですけれども。しかし、どちらにもそれがなければ通じない。それが本当の

「メンシュリツヒカイト」「人間性」

というものです。男にしろ女にしろ本当の人間性をもっているかという。私が「深い人間性」と言いたいのはそういうことなんです。そういった深い人間性は、いつもキリストに来てください。そうすれば、キリストほど人間らしきひとはない。彼も泣くときは泣いたし、笑うときには笑った。

そういう意味で、

「汝はわが力なり」

という。そういった深い力で、その力は静かな力であると同時にまた自在に現れるところの力。力の表現体は――根底は、深い所は見えない――それが静動自在な現れ方をするわけです。

●三相一貫

しかも、その静動だけでなく、私は真善美の世界もやはり一如であると思っている。本当の真のものでなかったら、美なんていつても本当の美ではない。それが言葉の善悪の世界を越えたところの善の世界です。善悪の相対的な善を越えた善。「至高善」とプラトンが言ったところの世界の善。まだギリシア哲学では少し分析的な面が強すぎるけれども。その「真・善・美」というものが一如で、これはやはり三相一貫です。

「この花はうるわしい」と一応、見るけれども、これは本当に自ら飾っていない。そのままの表れ方を真という。そして、これが語るところのものは、善悪を超越したところの、



いわゆる相対的な善悪を超越した、善がそこに表れている。そういうようなのがこの真善美の世界なんです。

「信・望・愛」がやはりみんなそうです。それから、「神・キリスト・聖霊」。みんなこれが三位一体というのは決して、「三位一体がどうのこうの」と議論するような世界ではない。本当の意味で三位は一体。だから、我々が「ヤーヴェー」「神」と読もうが、もう「キリスト」と「聖霊」がその中にちゃんと含まれてこなければ、本当の読み方ができない。

●涙の谷

⁵ その力なんじにあり、

その心シオンの大路おおじにある者は

さいわいなり。

⁶ かれらは涙の谷をすぐれども、

其処そこをおおくの泉あるところとなす。

この「涙の谷」という字はそのまま読んでもいいけれども、これは「バーカー」というバルサムバルサムの樹のような香りのいい樹で、乾いた谷に生える樹。サムエル後書5章に出ている。それは「涙」という言葉と語呂的に通ずるから、むしろ「涙の谷」と読んだ方がおもしろいくらいです。そういつた「バーカーの谷」というときには今度は、「乾いた谷」ということ。バーカーの樹が生えるような谷は乾いた谷だから、その乾いた谷をも多くの泉ある所とする。だから、言葉の上からいうと、それは「バーカー」という樹の谷、即ち「乾ける谷」ということ。乾ける谷をもそこを多くの泉ある所となすという。

今度は、人生はまた

「ヤンメルタル」「クレメンタル」「涙の谷」

という言葉にその「バーカー」という字がかかるから、「涙の谷」と読んでも、詩的にはおもしろいわけです。また事実、人生は涙の谷です。多くの涙を流す。そして少しおかしくなったりいろいろするわけだ。けれども、そのときに環境を見たり、運命を見たり、自分を見たらダメですよ。そういうところにでつくわしたら、もういつもその涙の、また乾きの谷を本当のうるおいの、また逆にいえば、喜びの谷に変えてしまう。その源泉は、

「われは活水である。活ける水である」

と言ったこのキリストです。ヨハネ伝4章。即ち、「汝はわが泉」という言葉は詩篇の中にもどこかにあったはずです。87篇の一番終わりの句に、

「⁷ うたうもの踊るもの皆いわん、わがもろもろの泉はなんじの中にありと」(詩

87・7)

「わがもろもろの泉はなんじの中にあり。汝こそわが生命の源泉、わが力の源泉である」



というわけです。

●涙を歓喜に

また前の雨は

もろもろの恵みをもて之をおおえり。

「前の雨」というのは11月頃に、種蒔きの前に降る雨です。種蒔きの前の雨で、向こうでは11月で、それで種を蒔くのに具合がいいわけです。申命記32章に出ています。

さきほど黙示録で読まれたように、涙が流れても、その涙をぬぐうてくださる。即ち、キリストにすれば、涙が逆に歓喜に、よろこびに変わる。

「悲しみも喜びに変える」

とイザヤ書35章にもあった。

●力より力に

⁷かれらは力より力にすすみ、

遂におのおのシオンにいたりて

神にまみゆ。

と。この「力」という字は「ハッイル」という字ですが、「命」とか「力」とかいう字はみんな「C」の発音で強い。「ハイル」でなくて「ハッイル」、いかにも力強い言葉です。

「力より力にすすみ、遂におのおのシオンにいたりて神にまみゆ」

と。クリスチャンは、どんなことがあっても、へこたれない。御霊のクリスチャンがへこたれたら、御霊をいただいてないわけです。聖霊の器となったら、もうこれははつきりと生命力を、「力より力にて」と無限に、この無量の力をたまわりつついく。ピリピ書にもパウロが言っているでしょ。

「¹²我は卑賤^{いやしき}におる道を知り、富に居る道を知る。また飽くことにも、飢うることにも、富むことにも、乏^{とも}しき事にも、一切の秘訣を得たり。¹³我を強くし給う者によりて、凡ての事をなし得るなり。」（ピリピ4・13～14）

「我を強くし給う者によりて、我に力を与えてくださるところの者によつて、一切の事をなし得る」

と。

「我によらずは何事をもなし能^{あた}わず。我によれば一切のことをなし得る」

というキリスト自身の言葉もある。

「神はわれらの避^{さけ}所また力なり。なやめるとき^{いと}の最^{たすけ}ちかき助なり」（詩篇46・¹）

というあの詩篇46篇もそうです。神はわれらの避^{さけ}所また力である。キリストの中に自分た



ちは入ることが避所だという。決して卑怯なことではない。キリストの中に突入することが「避ける」ということ。キリストの中に入ったら、俄然そこに力がくるわけです。

⁸万軍の神エホバよ、

わが祈りをききたまえ。

ヤコブの神よ、

耳をかたむけたまえ。

しょっちゅう出てくる言葉ですね。

⁹われらの盾なる神よ、みそなわして、

「盾」とは守り手です。キリストは盾である。

なんじの受膏者の顔をかえりみたまえ。

「なんじの受膏者」とは自分のことですよ。作者自身です。

「膏そそがれたる者」

とは祭司ですから。我々自身がこの膏そそがれたる者なんだ。これはヘブル書でやったとおり、我々自身が祭司なんだから。霊的な祭司です。いわゆる坊さんではない。ひとの執り成しのできる人。ですから、

「汝の受膏者、膏そそがれたる者、聖霊をそそがれたる者」

が即ち我々です。「膏そそがれたる者」とは他人のことを考えてはダメです。

●一日は千年

¹⁰なんじの大庭にすまう一日は

千日にもまされり。

汝を住まいとする者は、汝を衣とする者は、一日住んでも、一日そういうように生きてても、それは千日のごとくである。

「一日は千年のごとし」

なんていう言葉もある。まあ、私は時々「百歳突破」なんて勝手なことを言うけれども、「百歳突破」なんてことは問題でないので、一年で結構なんです。本当に一年を生きることがもう永遠をもっていることなんですから。

われは悪の幕屋におらんよりは

寧ろわが神の家の門守とならんことを欲うなり。

私たちは神の国の、神の家の門番ですよ。門番は卑しき者ですが、そのいやしきの中に実は光栄がある。「悪の幕屋」とはこの世のこと、この世は悪の幕屋です。これはどこか他にも出ていたと思う。

「わが神のいえの門守とならんことを欲う」

とは、もちろん旧約においては、「生きて門守となろう」という意味です。



●神は日なり

11そは神エホバは日なり盾なり。

「神は日である」という言い方はただここにしかない。太陽神みたいな言い方をしているけれども、別に太陽神という意味ではない。日本でも天照大神は日神ですけれども。いつか、『ハレルヤ』誌第2号の中の「七日の靈願」のところに書いたでしよ、「日曜 義の日」ところに。マラキ書4章に、

「1万軍のエホバいたもう、視よ、炉のごとくに焼くる日來らん。すべてたかぶるもの驕傲者と悪をおこなう者は藁のごとくにならん。そのきたらんとする日彼等を焼きつくして根も枝ものこらざらしめん。2されど我名をおそるる汝らに義の日いでて昇らん。その翼には医す能をそなえん。汝らは牢よりいでしこやし犢の如く躍跳ん。」（マラキ4・1〜2）

「義の日いでて昇らん」

とある。これはキリストのことを言った。キリストはまさに私たちにとって太陽である。まあ、本来の日本人の感じでいうと、月が非常に慕わしいわけです。今だって私はもちろん月が好きですよ、月を眺めることが。けれども、太陽が特に意味をもってきたのは、この福音の世界に入ってからです。我々にとって「光」という言葉は、

「光、世にきたれり」

というこの「光」という言葉のとは、何といったって、太陽がなければ、光ということ人間には浮かんてこないわけです。

「汝は光なり」

という言葉は他の詩篇にもありますよ、けれども、

「汝は日なり」

という言葉はちよつとない。「光」という言葉は、詩篇の27・1、36・9、43・3、89・15あたりに出ているけれども、「日なり」という言葉はここにちよつと大胆に書いてあるだけです。

「エホバは日なり、また一切のものから守ってくださるところの盾である」と。「盾である」ということは「守りなり」ということです。

11そは神エホバは日なり盾なり。

エホバは恩と栄光とをあたえ、

直くあゆむものに善物をこばみたもうことなし。

12万軍のエホバよ、

なんじに依頼よりたのむものはさいわいなり。

「さいわいなるかな、なんじに依頼よりたのむもの」
と。まあ、そういうわけです。



●詩「白熱の魂」（本願道）

それで、皆さんにお配りしたプリント「白熱の魂」〔後に「本願道」と改題し著作集第8巻『詩歌集』109頁に所載〕。我々がキリストを本当に力の力として、どんなことがあっても、病床に横たわりましても、どんなことがありましても、運命が行き詰まっても、

「せんかた尽くれども望みを失わず」

とパウロがあれだけの凄い伝道の迫力をもっていたのは、本当にキリストを生命の力としたからです。キリストだけが本当にわが力であるという。

では、「白熱の魂」という詩を一応、読ませていただきますようか。「曙よ！」と、ちょうどそういう元日でしたから。私は元日を予想してこれを書いてしまったんだけど、元日になったらちゃんとやっぱり太陽があがってきたから。

〔註…この詩「白熱の魂」は後に「本願道」に改題された際に一部書き直された。削除された句を（ ）で、追加または変更され句を「 」で示す〕

「本願道」（白熱の魂）

――一九七〇年頭――

曙^{あけぼの}よ！ 汝がバラ色の大気に

（キリストの霊血が匂う。）

「キリストの香気が匂う。」

旭^{きょくじつ}日よ！ 汝が金色の翼に

神の義が照り初^{はじ}めた。

彩雲よ！ 汝が妙えなる姿に

聖霊の息吹が漂う。

ここに三位一体の神がちゃんとうたつてあるわけです。

一九七〇年の元日は

おごそかにかくぞ明けた。

（汝、はやくも春雷を呼ぶや）

（神の怒りを示さんとするか。）

日本は審判にへたするとあう。

（霊雲よ、聖霊の言を伝えよ）

（仰ぎ見る霊雲の一角を。）

「仰ぎ見る雲外の一角を。」

見よ、天裂けて霊光閃く。

轟くはいかつちか神のみ声か。



（人々よ）

山べに、海べに働く人よ。

野らに、市井に働く人よ。

会社、官庁に勤める人よ。

私塾に、学舎に教える人よ。

週日はこれ働く相対界。

七日目ごとの日曜は

たましいのための絶対界。

私たちはこの絶対界にこの日曜は迎えて入っているわけです。

例えば曠野の旅人が

オアシスに英気を養う如く、

人々よ！ 聖典の世界に躍り入れ。

聖書の世界に入っていく。

聖光、無量寿、永遠界を

たましひの現実とせんがため。

「神は死んだ」と叫んだ哲人の

ニーチェです。

逆説の言はうそかまことか。

それをうそとする者は本当に逆に神を受けとつてない。しかし、「神は死んだ」と批判されるほどダメだったんだから。また、ある意味において、これは予言ですよ。現代は、ニーチェが言ったとおり神は死んでいる。しかし、本当の神さまは死んでいるのではないんだけれども。

現代人よ、実存で答えるがいい。

現実の中の現実、相対即絶対、

永遠も無限も無量も絶対も

秘められてあるを知らないか。

我々の毎日の相対界に本当は絶対界が切り込んでいる。そいつを呼吸して生きろということです。

超在、遍在、貫在、内在の

一切に超在している神、遍在したもうところのキリスト、貫在したまた内在したもうところの聖霊。だから、神・キリスト・聖霊のことです。

神の妙なる実存を知れ！

（政治の、経済の、社会の、生活の、）

「山積の政治問題、」



「迷宮の経済活路、」

「混迷の社会状況、」

「危機をはらむ生活事情。」

要求の、闘争の、

不満の、紛争の、と

ものぐるおしき現実よ。

（まことの人間がそこに不在だ。）

それぞれいろんな問題はあるでしょう。ところが、まことの人間が不在だったら、いくら
そう言って騒いでみたところで、本当の解決には進んでいかない。

テレビの、映画の、

パチンコの、漫画の、

たくさん、漫画は小学校から大学まで読んでいる。

週刊誌の、エロ雑誌の、

（飲み屋の、キャバレーの、

「バーの、キャバレーの、」

百貨店の、くるまの、と

めまぐるしき現実よ。

（幻滅の穴がそこにあいている。）

（人々よ、何でもやるがよい。）

やるならやってごらん。そして行き詰まったら目が覚めたらいいと。

（だが、底なき空虚はいかんせん。）

現実八方塞がり。

現実八方破れ。

「人々よ、時にして文明の夢幻をのがれ、」

「大自然のふところにて瞑想せずや。」

仰ぎ見よ、霊界の天！

見よ、天は裂けたり。

見よ、霊光は閃く。

聞け、いかづちの声を。

聞け、神のみ声を。

平伏せよ、神の聖前に！

為政者も、民衆も

今にして平伏さないなら、

今にして神を畏れないなら、
妖雲は全地を蔽い、

闇黒の翼に乗って

サタンの使者は為政者の腹に、

地を這う蛇は民衆の胸に、

詭計をかもし、謀略を囁き、

鬭争は巷に、擾乱は国に、

千態万様の蠢きを示し。

おぞましき現実と化しゆこう。

嘗てイスラエル民族が

アッシリア、バビロニア、エジプトの

三大国に囲まれて

国家存亡の危機に陥ったとき、

輩出した預言者たちは、

（為政者と民族の不信不倫暴虐に、）

「為政者と民族の不信不倫暴虐のゆえ、」

（神の審判と悔改を告知したが、）

「神の審判を告げ知らせ、」

「国民の悔改めをうながしたが、」

その警告徒らに曠野に木霊し、

北イスラエル南ユダの両国は

相前後して鷲と獅子の強国に

餌食の如くに蹂躪されて、

涙は涸れ果て血は大地が吸った。

アメリカ、ソ連、中国の

（三大国に介在する日本よ！）

「三大国に介在する日本人よ！」

「安保」にも「安保反対」にも非ず、

第三の道が汝の道であると

（啓示し給う天来の声に聴け。）

「啓示し給う天来の声に聴かずや。」

東なるイデオロギーにも、

西なるイデオロギーにも、



それぞれ
夫々の意義と役割はある。

さはれイデオロギーを

固執し絶対化するところ、

そこにイデオロギーの

パリサイ性ありと知らずや。

人よ知れ、理念には限界ありと。

まことの平和の所在はいづこ。

たがいに理念を尊重しつつ、

それぞれのイデオロギーには真理があるから、尊重して結構です。

（その限界を認識し）

超理念の世界を、

各国の、各社会層の、各人が、

確かと胸中に開示するところ！

（この一事にこそ全人類の）

そこにこそ全人類の

平和への天道が開かれてある。

超理念の世界とは何か。

（神も如来も）

「神か如来か、」

（天もアラームも）

「アラームか梵か、」

「天」というのはシナ思想です。「アラーム」はマホメット教。

（超理念の实在なるぞ）

それぞれにとっては实在ですから。

「天か無か。」

「名称はいかにもあれ、」

「人のたましひの志向する絶対界に」

「超理念の根源はある。」

人間の心魂を呼ぶ本願者！

（人の心はかかる本願の实在に）

（出会うまでは平安を得ない。）

「人間の実存を担う実在者！」

「その声を寂聴し、」

「その光を靈視し、」

「その靈源を体受せよ!」

「たましひはかかる本願の实在に」

「豁然と氣がつくまでは平安がない。」

この平安あつての平和、

平安は縦の関係、平和は横の関係。

この絶対界あつての理念。

(さればこの第三の道、宗教道を)

「さればこの第三の道、本願道を」

為政者も民衆も身心に体得し、

人らしき人に回生し、

(天来の靈に心を燃やし、)

「天来の靈に心を燃やすなら、」

隣人に、隣国に、

渥き握手の手を伸ばし、

社会の中に、国際間に、

(信義、信愛の実を結べ!)

「信義、信愛の実は結ぶ。」

(人間愛を溢れしめよ!)

「人間愛は溢れゆく!」

「幾百万の人々よ、相抱けよや!」

この接吻をあまねく世界に!

同胞よ、星の幕屋の彼方には

愛の御父ぞ在ますなる。」

これはシラーの「アン・ディ・フロイデ」(歓喜に寄す)という詩の一句。ベートーヴェンが

これを「第九シンフォニー」に使ったわけです。

シラー、ベートーヴェンの

(悲願を空しくするな)

「第九交響曲の大悲願を」

「胸に確かと受け留めよ。」

「またヘンデルの大合唱曲の」

「ハレルヤー」をして

「胸底深く響かしめよ!」

嘗てヤコブの泉のほとりで

愛の靈泉をもった人に、

出会ったサマリヤの女のように、

私も叫ぶ、「来てごらん！」と。

「来たりて見よ」という言葉です。

人々よ、福音書のイエスの許に

あるがままの姿で来たれ！

「我は道なり、真理なり、生命なり」

（かくのたまえる実在者に）

「かく告白した実存者に」

体あたりして降参すれば、

キリストという十字の門が

開かれてあるを見出す。

（この門を通れば）

「この無門の門を透得すれば」

復活の主が「よくぞ来た！」と

（欣喜たもう。）

「必ずや欣喜迎える。」

見よ、そこに靈光溢れ、靈氣漂う。

ここに本当の力の現実があるわけです。

（キリストに全身全霊を投入せよ。）

その靈光を浴び、靈氣を吸って、

「聖靈のバプテスマにあづかれよ。」

「かくてキリストに全身全霊を投入すれば、」

「かの「正氣の歌」に謳はれた」

「天地正大の気はおのづから」

「五臓六腑をかけめぐる。」

「秀でては富士の靈峯となり、」

「発いては万朶の桜花となり、」

「凝っては百鍊の鉄となり、」

「注いでは大洋の水となる、」

「創造の靈氣この身に通う。」

「この氣粹然として神州に鍾まる」

「日本本然の相を胸に抱かん！」

一九七〇年、日本の道は

（かくて福音の原体イエスのもとに）

（帰入し帰命するにある。）

（そこに第三の道は体現される。）

（日本の活路は開かれていく。）

「儒教仏教綾あやなせる」

「日本精神文化の旧道に」

「福音の靈石を新たに舗しいて」

「第三の大道を開拓するにある。」

顧みれば最澄は諸法実相を一念三千の裡に把握した。

空海は真言の本質を

（「阿字是一切法教本也」と言い切った）

「阿字是一切法教本也」と喝破した、

（見事さよ。）

「その直観のあざやかさ。」

源信は『往生要集』をもって

「夫れ往生極樂の教行は

濁世末代の目足ひらなり」と指示して

救済の道を拓ひらいた。

法然上人源空は仏法を、

『一枚起請文』に集約し、

南無阿弥陀仏の一向念仏に

魂の安住、実存の道を開示した。

親鸞は改革者ルターの

『キリスト者の自由』に優るとも

劣らぬ名篇『歎異抄』にて

誓願・名号の不思議な一如の

（いみじきおとづれを喝破した。）

「いみじきおとづれを道破した。」

栄西禅師の「大いなるかな心や」の

大文字にはフィヒテも敵せず。

フィヒテは「ダス・イッヒ」（我、自我）の哲学ですから。

道元は「参禅身心脱落也」と断じ、

「一草一木俱身心也」と観じ、

無即万象の妙境を語った。

大洋にさし昇る朝日に合掌、

「南無妙法蓮華經」を誦した

曰蓮上人。その憂国の気魄、

「日本の柱」は今もなほ立っている。

白隠禅師の身心一如は到る処

色心不離の達観に通い、

隻手の声を寂聴し、

片手の拍手を静かに聞くこと。

闇の夜に鳴かぬ鳥の声を聴く。

蓮如上人は妻帯幾たび、

聖俗一如を子宝に現はした。

これは何回も奥さんを亡くしている。

良寛は愛の仙人。

「慈念衆生猶如赤子」と。

ああ慕はしき霊的人物、

「歴史の夜空に輝きわたる。」

（これらの霊統を継承して）

「これら幾流の霊統を継いで」

この精神的危機の日本に

霊的一大革命を起こさん者は、

「福音の原体キリストの許に」

「帰入し帰命し、南無キリスト」

「キリストと一如・一体とならん哉。」

「キリストの福音、原始の福音、」

使徒的信仰を体現せんとする

遺れる民、選びの器ぞ。

教会の内外を問はず、到る処に、

幕屋に、召団に、野人の中に、

隠された福音の戦士はあらん。

起てよ、福音の兄弟姉妹よ！

「キリストの霊的な体、エレクシアよ！」

キリストはねんごろに



（われらの心腸に呼びかけ給う。）

「われらの心胆に呼びかけ給う。」

「汝わが十字架に贖はれて、

霊貧しく、無者とされた者よ！

天国、聖霊の我れ汝の中にあり。

（無者よ、無限無量者よ、）

「無者よ、無限無量を宿す者よ、」

わが霊による汝、白熱の魂よ、

祈りせよ、汝が悲願霊願をもて

わが本願に祈り入れよ！

わが霊言、わが聖霊汝の中に

化体して力となり、生命となれ。

（使徒らの如き白熱の魂を）

「使徒らの如き聖霊の器を」

我は全地の此処彼処に起こす。

「み霊の群が日本全土に」

「霊燈をかかげて道を拓こう。」

わが本願を身証せよ、汝！」

（一九七〇年はついに来た。）

（わが幕屋、福音の旅路について）

「一九四〇年、武蔵野に幕屋を開いて

茲に三十周年を迎へんとする。

「一九五〇年、阿蘇火山のふとこで」

キリストは私に聖霊の火で

バプテスマを施し給った。

そのために私は期せずして

（無教会者流と袂をわかつた。）

「イズムやセクトと袂を別つた。」

「福音の源泉に、源流に、」

「使徒的信仰に立ち歸れ！」の

旗幟^{きし}を掲げて二十年。

（人は去り人は来たって）

「遺れる民」の一環をなす



（キリスト召団は68年の夏）

（浅間高原鹿沢の里に成った）

（召団の兄弟姉妹よ、白熱の魂よ、）

（キリスト道、原始福音の無碍の）

（一道一貫、使徒一如たれ！）

〔都の西北、武蔵野の幕屋、〕

〔キリスト召団、小さき群よ！〕

〔破れ幕屋を張りながら、〕

〔ただキリストの本願道を〕

〔今日も明日も踏み往かん！〕

――完――

●一切はキリストを生きる恵み

そういうわけであります。

また、「主の身さながら」（『詩歌集』119頁に所載）という詩はクリスマスの時に読みました。多少所々変えましたけれども。これは次の次の号にしようと思ったけれども、クリスマスのことですから、特別に刷って別刷にしていたいただいたわけです。

そういうわけで、どうぞ、この一年は、私たちは本当に、さきほど申しましたような静動一如の和をもつて、また自分自身の中にそのような静動を一如としてもつような、キリストという力、生命の力を本当にいただいて、突破していきたいと切に思うわけです。

具体的ないろいろな問題にあつて、お互いに苦しむことがあろうと思いますが、その時は本当に祈りあつて、そして、何よりも自分自身がその力を直接キリストからいただいて進んで行くというための鍛えであると。一切の事柄はキリストを生きるその恵みであるとして、すべての体験を恵みとしてキリストを生きていく。こういうように進んで行きたいと切に念願するわけであります。おわります。

